

忘れられない二十三日

柏崎市立高柳中学校 一年 村田 幸実

急に大きなゆれが始まった。私はその時、
何がおこったのかわからなかった。

私はすぐに安全な所に

中では、花びんが割れた音などが郷音だった。

そして、その地震は何度も続いた。

ゆれがおさまったら、消防団の人がみまわ
りにきてくれた。少しうれしかった。

放送では、震度五弱と言っていた。想像以

上に大きて、驚いた。

私は、驚きのあまり、頭がまっ白になり、

声もふるえて、力がぬけていた。夜もぬむ水

なかつた。

でも家族がいて、少し安心した。

朝、起きてもいっこうに電気はつかなか

た。

家に入ってみたら、私は声が出なかつた。

なぜかというところでも無残な姿になつてい
たからだ。

おふろのタイルはほとんどはがれ、額が
ちて、ガラスのはへんがおつていたりなど、
たくさん被害があった。そして、電気が使
えないので、金魚の酸素がだんだんなくな
て、死んでしまった。他にも冷蔵庫や
テレビなどが使えなくなつてしまった。ガス
も使えなかった。なので、食べ物はずつちを
使つて、ガスに火をつけて、食べ物を焼いた
りして食べた。

テレビが使えないので、ラジオでその時の
状況を得た。

地震が起きた日は十月だったので、少し寒
か、た。

この時、電気はとても大切なんだと、感じ
た。

電気がついたのは、翌日の朝、九時ごろだ
った。とてもうれしかった。

私たちはそうじにとりかか、た、当たり前
だが被害が大きかった。たので、すぐには終わら
なかつた。終わ、た時は、達成感があつた。

私はこの地震を忘れない二十三日にな
ったと思う。